

傳 藤原行成 和漢朗詠集 四

301

10

帙入



始



傳藤原行成書

和漢朗詠集

釋文

四

傳藤原行成筆和漢朗詠集 (四)

閑居

不獨記東都履道里有閑居泰適之叟
亦令知皇唐大和歲有埋世安樂之音
宮車一去樓臺之十二空長隙駟難追
綺羅之三千暗老
幽思之窮深巷無人之處愁腸欲斷

閑窓有月之時

鶴籠開處見君子書卷展時逢故人
人間榮耀因緣淺林下幽閑氣味深
官途自此心長別世事從今日不言
蕙帶羅衣抽簪於北山之北蘭橈桂楫

鼓舫於東海之東。江相公

都府樓纔看瓦色觀音寺只聽鐘聲不出門

海跡未拋苔徑月避喧猶臥竹窓風佐幹

陶門跡絕春朝雨燕寢色衰秋夜霜以言

わ可やとはみちも那支^マまであれ爾^ニ

希利^シつれな支^マ人をまつとせしま爾^ニ良僧正

眺望

風飄白浪花千片雁點清天字一行白

出紫闥而東望山岳半插雲根之暗躋

翠嶺而西顧家鄉悉沒煙樹之深

見天台之高巖四十五尺波白望長安

城之遠樹百千萬莖薺青順

江霞隔浦人煙遠湖水連天雁點遙直幹

一行斜雁雲端滅二月餘花野外飛順

老眼易迷殘雨裏春情難繫夕陽前寫茂

みわ多世はやな支^マさ久ら^クをこ支^マま

せて美^ミやこ所^コ八^ハるるの爾^ニし支^マなり介る素性

餞別

與君後會知何處爲我今朝盡一盃白

前途程遠馳思於雁山之暮雲後會

期遙活纓於鴻臚之曉淚

昔聚丹鳥鏡寸陰於十五年之間今

迎畫熊欲分手於三百孟之後

楊岐路滑吾之送人多年李門浪高

人之送我何日餞諸故人序

万里東來何再日一生西望是長襟野

九枝燈盡唯期曉。一葉舟飛不待秋。庶幾
欲以浮生期後會。還悲石火向風敲。音
於もひやるころは可利はさわらしを
な爾へ多徒らんみねのしら久も直幹
としことに者るのわ可れをあ八れとも
ひと爾於久るゝ人所し利介る清原元直
い能ち多爾ころ爾可那ふものならはな
爾可わ可れのかなし可らまし

行旅

孤館宿時風帶雨。遠帆歸處水連雲。許渾
行々重行々。明月峽之曉色不盡。眇々復
眇々。長風浦之暮聲猶深。順
曉入長松之洞。巖泉咽嶺猿吟。夜宿

極浦之波青嵐吹皓月冷爲雅

渡口郵船風定出。波頭謫處日晴看。野

洲蘆夜雨他鄉淚。岸柳秋風遠塞情。直幹

蒼波路遠雲千里。白霧山深鳥一聲。

本能ゝとあ可し能うらのあさ支利爾

しま可久れゆくふねをし所お无ふ人丸

わ多のはらやそしま可けてこ支いて

ぬと人爾は徒介よあまのつりふね野

多よりあら者みやこのい可て徒介やら

む介ふしら可者のせ支はこえぬと兼盛

庚申

年長每勞推甲子。夜寒初共守庚申。
巳酉年終冬日少。庚申夜半曉光遲。

於かき那な可かのえさると支たなきつりつね
者はあまやさ支た多たついをやさ支たたつ

帝 王

漢高三尺之劔坐制諸侯張良一卷之

書立登師傳後漢書

項莊之會鴻門寄情於一座之客漢

祖之歸沛郡傷思於四方之風後漢書

四海安危照掌內百王理亂懸心中百鍊

幸逢堯舜無爲化得作羲皇向上人白

聖皇自在長生殿不向蓬萊王母家揚銜

仁流秋津洲之外惠茂筑波山之陰淵

變作瀨之聲寂々閑口沙長爲巖之

頭洋洋滿耳和歌序

梁元昔遊春王之月漸落周穆新會

西母之雲欲歸晉三品

布政之庭風流未必敵於岷閬兼之者此

地也好文世德化未必光干黃炎兼

之者我君也冷泉院序

榮啓期之歌三樂未到常樂之門皇

甫謚之述百王猶暗法王之道江

玉辰日臨文鳳見紅旗風卷畫龍揚朝拜

刑鞭蒲朽螢空去諫鼓苔深鳥不驚國風

な爾はつ爾さくやこの者那ふゆこも

利いま盤るへとさ久やこ能者那

ちりぬれとま多久るはる者さ支に个利

地とせのちは支みを多のまむ小松天皇

親 王付王孫

庫車軟譽貴公主香衫細長豪家郎白牡丹芳

東平蒼之雅量寧非漢皇褒貴無雙

之弟哉桂陽鑠之文詞亦是齊帝寵

愛第八之子也第八親王書始

江都之好頸捷也七尺屏風其徒高

淮南之求神仙也一旦乘雲而何益順

開卷已知爲子道秋風帳望鼎湖雲保胤

我王孝行先何到梧岫秋風一片煙雅規

此花非是人間種瓊樹枝頭第二花江名花在閨軒

此花非是人間種再養平臺一片霞同前

い可る可能とみのを可はの多えはこそ

わ可於ほ支美能三那者わ春れめ達摩和尙

承 相付執政

季文子妾不衣帛魯人以爲美談公孫

弘身服布被汲黯譏其多詐後漢書

百里奚乞食於道路穆公委以政齊威

飼牛於車下桓公任以國漢書

孫弘閣閣無閑客傳說舟忙不借人白

西京席門乃是陳丞相之舊宅南山

芝澗寧非袁司徒之幽栖江

傅氏巖之嵐雖風雲於殷夢之後嚴

陵瀨之水猶涇渭於漢聘之初晉三品

春過夏闌袁司徒之家雪應路達朝

南暮北鄒大尉之溪風被人知同

やまさ久らあくまていろをみつる可那

者那なちるへ久くも可かせふ可かぬよ爾に兼兼盛盛

將軍

三尺劍光氷在手、一張弓勢月當心。陸蒙

雲中放馬朝尋跡、雲外聞鴻夜射聲。羅虬

千里往來征馬瘦、十年離別故人稀。許渾

隴山雲暗李將軍之在家、潁水浪閑

蔡征虜之未仕。晉三

職列虎牙、雖拉武勇於漢、四七將、學

抽鱗角、逐味文章於魯、二十篇。順

雄劍在腰、拔則秋霜三尺、雌黃自口、

吟亦寒玉一聲。順

蛇驚劍影、便逃死馬、惡衣香欲、嚙人。都

たまくし、个けふ多たとせあえぬ君可かみ

をあけ个な那な可からやはあらむと於おもひし公忠

刺史

士女笙歌宜月下、使君金紫稱花前。白

精明合浦珠相似、斷割崑吾劍不如。晉巨玄

雖三百盃莫強辭、邊土不是醉鄉、

此一雨句可重詠。保胤

多可支やにのほ利てみれ盤けふ利多

徒たみの可かまとは爾支はひ爾个利

詠史

燈暗數行虞氏淚、夜深四面楚歌聲。橋相公

賓雁繫書秋葉落、牡羊期乳歲華空。在昌

少日遂逃秦虎口、暮年初謁漢龍顏。紀

可所かいろはい可爾かあ八れとおもふらんみ

とせにな利ぬあし多、すして江相公

王昭君

愁苦辛勤顛領盡、如今却似畫圖中。白
身化早爲胡朽骨、家留空作漢荒門。紀
翠黛紅顏錦繡粧、泣尋沙塞出家鄉。江
邊風吹斷秋心緒、隴水流添夜淚行。同
胡角一聲霜後夢、漢宮万里月前腸。同
昭君若贈黃金賂、定是終身奉帝王。同
數行暗淚孤雲外、一點愁眉落月邊。名明
あしひきのやま可くれなる本と、
支寸き久人も那支ねをのみ所那久中實方

妓女

容貌似舅潘安仁之外甥、氣調如兄崔

季珪之小妹張文成

外人不識承恩處、唯有羅衣染御香。元
嬋娟兩鬢秋蟬翼、宛轉雙蛾遠山色。白
莫惟紅巾遮面咲、春風吹綻牡丹花。同
李延年之飾族、託一妍以始飛衛子
夫之待時、在衆醜而永異。野
秋夜待月、纔望出山之清光、夏日思
蓮、初見穿水之紅艷。備註序
算取宮人才色兼、粧樓未下詔來添。昔
雙鬢且理春雲軟、片黛纔生曉月纖。
羅袖不遑迴火熨、鳳釵還悔鎖香匳。
和風先導薰煙出、珍重紅房透翠簾。
嫌裏錦帳長薰麝、惡卷珠簾晚著釵。白

欲充今日新飢饉、泣賣先朝舊賜筭。紀
あまつ可せ久もの可よひちふ支とちよ
をとめ能す可たし者しとゝめむ

遊女

秋水未鳴遊女佩、寒雲空滿望夫山。賀蘭遂
翠帳紅閨万事之禮法、雖異舟中浪
上一生之歡會是同。以言
倭琴緩調臨潭月、唐槽高推入水煙。順
志ら那みのよ春るな支さによを
すく須あま能こなれ盤やごもさため春詠海人

老人

昔爲京洛聲華客、今作江湖潦倒翁。白
老眠早覺常殘夜、病力先衰不待年。同

再三憐汝非他事、天寶遺民見漸稀。白
紅榮黃落一樹之春色、秋聲結綬抽
簪、一身之壯心老思。

少於樂天三年、猶已衰之齡也、遊於
勝地一日、非是老之幸哉。

太公望之遇周文、渭濱之波疊、面綺
里季之輔漢惠、商山之月垂眉。策文 區衡
水無反夕、流年淚花、豈重春暮齒粧。尚商會 普三
林霧校聲、鶯不老岸風論、力柳猶強。同
醉對落花、心自靜、眠思除算、淚先紅。雅規
滿數可、見所故難、家計耳無可飛
ひ氏見流東、幾耳故所し羅ぬお起
難耳惡婦許、地春禮

い徒^つこ爾^か可^かみをはよせましよのな可^か爾^か
於^おいをいと者^はぬ人^しな^な个^けれ盤^は爲^は頼^頼

交 友

琴詩酒友皆抛我雪月花時最憶君白

陽春曲調高難和淡水交情老始知同

昔年願我長青眼今日逢君已白頭許渾

蕭會稽之過古廟託締異代之交張

僕射之重新才推爲忘年之友江

裴文藉後聞君久嘗禮部孤見我新淳茂

支みとわれい可^か那^なることをち支^ち利^り个^けむ

む可^かし能^のよこ所^そしらまほし个^け禮^れ

多^たれを可^か毛^もしるひと爾^に世^せむ多^た可^かさこの

まつもむ可^かし能^のともなら那^な久^く爾^に

懷 舊

黃壤誰知我白頭獨憶君唯將老年

淚白一灑故人文白

長夜君先去殘年我幾何秋風滿

衫淚泉下故人多白

往事渺茫都似夢舊遊零落半歸泉白

蘇州舫故龍頭暗王尹橋傾雁齒斜白

金谷醉花之地花每春勻而主不歸南

樓嘲月之人月與秋期而身何去晉三品

王子晉之昇仙後人立祠於嶺之

月羊大傳之早世行客墜淚峴

山之雪安樂寺序

促齡良木其摧歎遺愛甘棠勿剪謠美村

い二しへのな可能しみつぬる个れとも
とのころをしるひとそ久む
む可しを可个しとお无へと可くは可利
あやし久め爾もみつ那美多可那
よの那可爾あら万し可はと於もふひと
なきは於はくもなり爾个る可那

述 懷

專諸荆卿感之激候生豫子之投

身心爲恩使命依義輕後漢書

范蠡收責勾踐乘扁舟於五湖谷犯謝

罪文公亦遂巡於河上後漢書

翫其積礫不窺玉淵者曷知驪龍之

所蟠習其弊邑不視上邦者未知英雄

之所宿文選

人間禍福愚難料世上風波老不禁白

車前驥病驚駘逸架上鷹閑鳥雀高許渾

事々無成身也老醉鄉不知欲何之白

范蠡收責棹扁舟而逃名謝安辭巧伏

孤雲而養志江

昇殿是象外之選也俗骨不可以踏蓬

萊之雲尙書亦天下之望也庸才不

可以攀臺閣之月直幹

齡亞願驪過三代而猶沈恨同伯鸞歌

五噫而將去正通

言下暗生消骨火喉中偷銳刺人刀良春道

載鬼一車何足恐棹巫三峽未爲危中書王

楚三閭醒終何益周伯夷飢未必賢倚平
な爾をしてみのい多つら爾於いぬらん
とし能於もはむこともやさし久
よの那可はとともか久ても於なし
ことみやもわらやはてしな个れ盤
か久は可りへ可多くみゆるよの那可爾
うらやまし久もすめるつ支可那

慶賀

劍佩曉趁雙鳳闕煙波夜宿一漁船白
錢塘去國三千里一道風光任意看章孝標
想得江南諸父老因君鞭撻子孫多同
吏部侍職侍中著緋初出紫微宮正通
銀魚腰底辭春浪綾鶴衣間舞曉風

花月一窓交昔昵雲泥萬里眼今窮同
省躬還恥相知久君是當初竹馬童四巳上
うれしさをむ可しは所て爾つゝみ
个利こよひはみ爾もあま利ぬる可那

祝

嘉辰令月歡無極萬歲千秋樂未央謝靈運
長生殿裏春秋富不老門前日月遲保胤
わ可支みはちよ爾やちよにさゝれい
し能い者ほとなりてこのむすまて
よろつよとみ可さのやま所よはふ那
るあめ能し多こ所多のし可るらし

戀

爲君薰衣裳君聞蘭麝不馨香

爲君事容飾、君見金翠無顔色。白

更闌夜靜、長門闌而不開、月冷風秋、

團扇杳而共絕。張文成

行宮見月傷心色、夜雨聞猿斷腸聲。白

春風桃李花開日、秋露梧桐葉落時。同

夕殿螢飛思悄然、秋燈挑盡未能眠。同

南翔北嚮難付寒、溫於秋鴈東出西流、

只寄瞻望於曉月。吳越王書

聞得園中花養艷、請君許折一枝春。無名

寒閨獨臥無夫聲、不妨蕭郎枉馬蹄。(采女)

貞女峽空唯月色、窈娘堤舊獨波聲。爲畫

わ可こひはゆくへもしら須八ても那

志あふを可支利とおもふ八可り所射恒

多のめつゝこぬよあま多にな利ぬれ盤
ま多しとお无ふ所まつ爾まさされる人丸
い万こむといひしは可り爾な可つ支の
ありあ个能つ支をまちいてつる可那素性

無常

親身岸額離根草、論命江頭不繫舟。羅維

年々歳々花相似、歳々年々人不同。宋之間

蝸牛角上爭何事、石火光中寄此身。白

生者心滅釋尊未、免梅檀之煙樂盡哀

來、天人猶逢五衰之日。江

朝有紅顏誇世路、暮爲白骨朽郊原。義孝少將

雖觀秋月波中影、未遁春花夢裏名。江

よの那可をな爾多とへむあさは

らけこ支ゆくふねのあと能しら那み沙彌滿誓
て爾むすふみつ爾やとれるつ支可け
能ある可那支可能よ爾こ所あり个れ貫之
春惠能つゆもとのし徒久やよの
な可の於久れさ支多つ多めしなる覽良正

白

秦皇驚歎燕丹之去日烏頭漢帝

傷嗟蘇武之來時鶴髮白賦

銀河澄朗素秋天又見林園白露圓順

毛寶龜歸寒浪底王弘使立晚花前

蘆洲月色隨潮滿葱嶺雲膚與雪連

霜鶴沙鷗皆可愛唯嫌年鬢漸皓然巳上

しらくし志々らけ多るとし徒支可个

にゆ支可支わ个てむめ能花をる
倭漢抄 下卷

附録

和漢朗詠集は上下二卷より成り一條天皇の頃藤原公任といふ人によつて撰せられる

和漢朗詠集和注の序に

倭者本朝也本朝以歌述其懷漢者唐家也唐家以詩歌之詠有秀逸則人皆誦之故曰朗詠

とあり即ち雅趣佳麗なる和歌及漢詩文の句を汎く採録し倭漢朗詠集といひ略して倭漢抄又は朗詠集和漢朗詠と稱し單に朗詠とのみいふ朗詠とは熟字にして文選或は白詩文集にも見え時に臨み事に當りて聲高く朗々と吟詠する意味である この書は公任筆と傳ふる朗詠集

所謂古筆切として傳へらるものあれど公任筆といふ證左なく又藤原
行成の筆と傳ふるものあれど稍下れる頃の筆なるべしといふ説あり
て吾人の研究の上に於て最も信憑するに足るものなきは甚だ遺憾の
極みなり

之れが研究は恐らくは平安朝時代大江匡房勅命を奉じて従事せしな
らんか、かく多くの傳書本、板刻本又は寫傳本等頗る多く徳川初期に既
に三十餘種を算へ其後現代に至るまで上梓せられたるもの莫大の數
に達すべし斯の如く該本の如何に普及せられしかといふに公卿士人
の詩歌文章をつくる伴侶の友となり讀書の教科書、習字の手本となり
て普く巷間に流布せられしが爲めにして藤原定家の明月記に
昨今書朗詠上卷又點之爲小童讀書也とあるにても首肯せらるゝなり

昭和十一年十月廿一日印刷
昭和十一年十月廿五日發行
定價金貳圓參拾錢

和漢朗詠集
(四)

編輯者 武田基一
代刊者 武田基一
發行人 武田基一
印刷人 武田基一

發行所

東京市下谷區中根町七二
武田基一

電話 東京六〇五四八番

闲居

不獨記東都履道里有闲居泰適之叟

六介知皇唐大和歲有理世安樂之音白

字車一玄樓甚玄之十二字長深細難追

孫の羅く三子暗亮宋賦

幽思不窮深卷無人々々又愁腸益新

宋之志有月々時月上

鶴就一井又見君子去去々々時逢故人白

人冒榮耀因孫淺林下幽闲氣味深白

寔色自許心長別世事從今只不之白

蕙帶羅衣袖替於小山々々北榮桃桂檄

鼓往於東海之東江柳云

都府樓繞者瓦色觀音寺只聽鐘聲不出門
晦跡未拋苔任月避喧猶卧竹窓風佐袴
陶門跡絕春朝雨燕窠色衰秋夜霜以

わろくはとけみくらもいよまうあれよ
きわつれあし人たごまうとやとよ
良信正

眺望

風翻白浪花千斤鷹點清天字一行白
出紫園而東望山岳半插雲根之暗躋
翠嶺而西顧家鄉悉沒煙樹之深尊教
見天台山之高巖四十五尺波白望長安
城之遠樹百千万莖蒼青順
江霞障浦人煙遠湖水連天鷹點遙直袴

一竹斜鷹雲端滅二月餘花野外死順

老眼易迷殘雨裏春情難整夕陽前葛茂

みわすまけやなまよせくらとさくらよしの

そりそりやふらふらのよしよなりのくら幸性

餞別

とるははふふ知何事又の我と朝也一盞白

前年程遠地思に宿心々言書はふ

都道宿獨在何處々曉淚江相云

昔飛斗多詠可法お十五年々冒今

途直然分るに三百盞々々

物岐詠清吾々送人多々李心浪意

人々送亦甲浅詠在人者

万里東來何弄日 一生西望是長襟 野

九枝燈盡唯期曉 一葉舟飛不待秋 庶幾

多以浮生期後會 遂忘石火向風敲 昔

松もひかる... けりわけ... せ

... せり... せり... せり

... せり... せり... せり

... せり... せり... せり

... せり... せり... せり

... せり... せり... せり

行儀

孤館宿時風帶雨 遠帆陶甕水在雲 汗渾

行し重りし明月映し曉色不盡眇しは

眇々長風浦之暮亦猶深順

曉入長松之洞巖泉咽嶺猿今夜宿

極浦之波青嵐吹皓月冷為雅

渡口邨船凡之出波頭請更日晴表聖

洲蘆夜雨他鄉渡岸柳秋風遠寄情直抒

蒼波路遠雲外里白霧山深多一夢月

本々、いごあうれうらのあまよわ

しよりこれゆきふねきふかふ、元

わりのはらやきよけいこま

わんふははくふあまのつりすね聖

しよりあまきみわんいりけいわ

むくふらまのやまはこいあま聖

庚申

年長每勞推甲子夜寒初共守庚申

許渾

已酉年終冬日少庚申夜半曙光遲

曹

松干のいのちをさるるよなまいつりゆぬ

そあまやさしよふいそやさしよたし

帝王

漢高三尺之劍生制法侯張良一卷之

書立登師傅 後漢書

項庑之會鴻門寄情於一座之客漢

祖之婦沛郡倚思於四方之風 後漢書

四海安危照掌内百王理乱懸心中 白居易

韋彘堯舜五化得作義乃皇向上人 白

聖皇自在長生殿不向蓬萊王母家楊銜
仁流秋津洲之外惠茂汎波山之澗
夏作滌之苑兮宇之罔口沙長為巖之

頌洋之海耳和号為
陸空

梁元昔遊去王之月漸落周穆新去
西母之雲多均普三心

布政之庭風流未必歎於崑園魚之者此
地也好文之世德化未必光于黃矣魚
之者我君也卷泉沈序
普三心

榮啓期之歌三樂未到常樂之門皇
甫證之述百王江稽暗法王之道
玉宸日臨文鳳見紅旗風卷畫龍揚朝拜
呌

刑鞭補朽蠹空去諫諍苔深鳥不驚 國用

たうよけつよさるやのそれゆゑこも

わいさきいっつこせらやれをれ

ちりわれともささるけつちせよにわ

地とせのちけさみさをのよむ 少好屋
は製

親王 付と恐

庫車軟輦貴公至香衫細馬豪家郎 枯子芳
白

東平蒼々雅量寧非漢皇褒貴無雙

之弟部桂物鉢々文初之是高ニ事就

中書いこ子也 中、就之也
首三品

以者々好勁捷也七尺屏凡其流之高

淮南之求神仙也一旦京言而何益 順

雖三百盪其強敵遠去不覺醉心
此一兩句一重詠以清苦心詩圃
保胤
くくくわにのほりしみねをけしや
けたみののまははよよはまもくわ

詠史

燈暗教行虞氏渡夜涼四面也秋聲

桐相云

賓馬臨書秋葉之枯草却乳來華也

左云

少日遂世素事以言多初得漢就頽化

うみうけはつこふあはれとせふらんみ

とせにならわあーうすて

は相云

王昭君

愁苦辛勤顛顛盡如今却似畫圖中

白

身化早為枯骨
夜面寧作漢宮
翠黛紅顏錦繡
粧泣尋沙塞出
家鄉
江
遙風吹新結心
結院水流濕衣
便行
月
胡角一聲霜月
清
方
望
月
前
獨
明
天
若
短
黃
蓮
路
之
是
終
方
在
帝
王
月
散
行
暗
淚
孤
雲
外
一
點
愁
眉
落
月
邊
名
的

あーひまのち
うまれたるを
よすよとく人
をいしむを
よみよめく
中
実
可

妓女

容自似舅潘安
仁之外甥氣調
如兄
李娃之姊妹
張文成
外人不識承恩
更
唯
多
雅
不
待
傳
音
元

娟娟秀髮秋涼
翠苑將離
離人歸遠
山色白
昔在紅巾
危面
笑喜
風吹
院柱
丹花
李延年之
謗
族
詭
一妍
以
始
飛
隼
子
夫之
約
在
二
所
醜
而
永
莫
嗟

秋夜待月
繞望出山
之清
光
及日
出
遙初見
雲水之紅
艷

佳極序
甚

笑取字
人才
色並
擬
樓
東
下
詔
來
恁
首
雙
鬢
且
理
青
雲
妝
自
空
遠
曉
月
纖
羅
袖
不
遺
迴
火
尉
鳳
釵
還
梅
鏢
香
姿
和
凡
光
導
董
煇
出
珍
重
如
房
透
翠
簾
遍
慙
寒
錦
怯
長
童
暮
對
志
未
殊
羞
晚
香
斂
白
欲
忘
今
日
新
飢
癯
泣
莫
先
朝
意
獨
筆
紀

あまのつゆもくものいひちかたも
あまのつゆもくものいひちかたも

遊女

秋水未鳴遊女佩寒雲空滿望
翠黛紅圍万事之礼法雖異舟中浪
上一生之歡會是同

倚玉、後調、清溪、月唐槽、高推入、水、烟

さくらみよのよもろくあまのつゆもくものいひちかたも
すまのあまのつゆもくものいひちかたも

老人

昔為京洛聲華客、今作江湖潦倒翁
老眼早覺空殘夜、病力先衰不待春

五三憐汝非他事
天寒遠道見流斜
紅榮黃落一樹
春之枯矣結綬拙
著一身之壯心老思

少於樂天三年
猶之衰之歎也遊於
勝地一日非是老之幸哉月

太公望之遇周文
渭濱之波粲面臨

里孝之補瀆
直高山之月垂眉樂天 追法

水無及夕
流年淚花豈重春
暮齒粧尚齒 共三

林霧枝聲
聒不老岸
凡論力柳猶強 月

醉對落花
心自靜
眠思餘笑凌光紅雅規

海有之
凡亦如
程方系計
下り母之云

之之
凡係
東平
下り
如心
一程
ねお
友

難下之婦地喜社

いし...み...はよせ...の...
た...を...わ...し...れ...
ぬ頼

交友

琴詩酒友皆極我雪月花時最堪君
陽春曲調高難和淡水交情老始知
白

昔年願我長青眼今日逢君已白頭
許海

蕭會替之過古廟託締異代之文張

僕射之重新才推為忘年之友
仁

裴文藉後聞君久管礼部孤見我新
淳茂

ま...わ...れ...い...れ...
ま...わ...れ...い...れ...

む...う...わ...れ...い...れ...
ま...わ...れ...い...れ...

Handwritten cursive text, likely a transcription of the poem's content.

懷舊

黃壤誰知我白頭猶憶君
唯將老手

凌一灑故人交白

長夜君先去殘年我幾何
秋風襟袖

灑泉下故人多白

往事渺茫都似夢
意逐雲落半陽多白

蘄州訪友就双暗
王尹橋傾石菊斜白

金谷醉花之地花每春
自而之石為南

樓初月之人月与秋期
而身何言共白

王子晉之昇仙
故人立烟於維嶺之

月華大傳之早世行宮墜渡於岷

山之雲 安永と序
相見

從歎良本其持歎若也甘棠勿剪芳蔭 美林

いづののながみりみらわらわれとも

とのらさきくみんきんむ

むうをけるくとみんとこはわ

あやうあふともみらけり

よのしあはれはとたよふいと

たもつけたはほもたうりよるん

述懐

專諸荊卿之感激侯生豫子之投

身心為息使命依義極 はげま

范蠡收責勾踐乘扁舟於五湖各犯謝
罪文公亦遠巡於河上江漢書

既其積礫不窺玉測者曷知孺就之
所蟠習奕邑不視上邦者未之英雄
之所謂文選

人言禍福無稽料世上凡波老子繫白

車前驥病駕駘逸架上鷹困鳥雀危許渾

事以無成身也老醉鄉不知欲仰之白

范蠡收責棹扁舟而逃名謝安辭功伏

孤雲而養志江

昇殿是象外之選也借骨不可以語毫

末之雲尚書云天下之望也庸才不

可以攀其墓兮月並精

敬正顏和遇三代而稽沈恨同伯鸞

五噫而伯志正通

之下暗生清骨大嘆中條銳刺人刀良善道

載鬼一車何足恐椽豆三峽未為危中書

楚三閭醒終中益周伯夷飢未為矣信平

たふよをうへみのいりまよたかかん

いむたもはむいよもわとく

よのれいはとくとかきしといたま

いとふももつるはそーながれを

かきけうらうらうかむのいよ

いよももくせふあつしあひ

慶賀

初佩曉瑞菱風飛旆波板宿一漁翁

鈔唐吉國三子望一道風光得意表

章孝標

想得江南謫父老因君鞭棹子孫多

月

吏部侍郎江津侍中著此初出紫微宮

正通

銀魚徧底舞喜浪雙鸞不習曳曉風

花月一言交昔既雲泥可望眼今新

省躬承恥相知久君是當初竹了童

同上
四韻

うわらへはみよとあまわらへ
ふわらへはみよとあまわらへ

祝

嘉辰令月歡無極萬歲千姝樂未央

謝偃

夕殿螢飛思暗結
秋燈挑盡未眠月
南翔北嚮誰付寒
溫於秋鳴東出西流

只寄瞻台於曉月

吳越書

聞得園中花養艷
請君許折一枝春

無名

寒園獨卧無夫聲
不妨蕭郎任馬蹄
貞女峽空唯月色
窈娘堤舊獨波聲

力憲

わうふけゆくしとらんそもい

こあふをこまわとおもふいろふ躬恒

このあつゝあよあまにになむねは

まよとあふふあつとよあまねる人丸

いふむとあひけりまなうる上の

ありあふれつよまなうるまな素性

無常

觀身岸額離根草論命江頭不整舟

羅維

年々歳々花相似歳々年々人不同

宋百

蝸牛角上爭何事石火光中寄此身

白

生者必滅釋尊未免梅檀之煙樂盡衰

來天人猶逢五衰之日

江

初有紅顏誇在路暮為白骨朽却原

義孝

雖觀秋月波中影未道春花夢裏名

江

よのしをながうしころむあをば

らけいよゆくのあをみしらみは

てよむすふみつるやむるつよみ

れあういすうみぶよふありがれ

海峽抄下巻

昭和十一年十月廿一日印刷 定價金貳圓參拾錢
 昭和十一年十月廿五日發行

編輯者 かな名 讀全集刊行會
東京市下谷區中根町七二 武田墨彩堂

代售者 武田 墨彩堂
東京市下谷區中根町七二

發行人 武田 墨彩堂
東京市下谷區中根町七二

印刷人 黒川 秀一
東京市下谷區中根町六丁一六〇

發行所 東京市下谷區中根町七二
 武田 墨彩堂
電話號碼 三五七番
 郵政東京六〇五四八番

昭和十一年十月廿一日印刷 定價金貳圓參拾錢
 昭和十一年十月廿五日發行

終

